

## 研究雑感

人文学部教授 藤 田 隆

### 簡単な経歴

私は、昭和20年に東広島市に生まれ、小学校4年より大学院まで広島市内で過ごした。その後、3年間の広島県立江田島高校での教員生活を経て、昭和52年に福岡大学に赴任した。

研究生活に入る原点は、大学の卒業論文の作成にあると思う。昭和40年に広島大学文学部史学科地理学専攻に入学、さらに同大学院修士・博士課程に進み、人文地理学を専攻した。研究室は文学部史学科に置かれていたが、地理学教室は、「自然地理学」と「人文地理学」の2専攻があった。ともに少人数で、普段両専攻は講義など、常に一緒であったと思う。そんななか、当時の恩師、先輩や後輩で自然地理学を専攻された方には、南極観測隊にも参加され、地形・地質などの調査・研究に取り組まれた人も何人かおられた。

### 研究テーマとの出会い

学部では卒業論文が必修だったので、この卒業論文作成が研究へのきっかけとなったと思う。当時は特別に興味・関心のあるテーマがなく、漠然といろいろ考えていたが、ある時、実習などを指導担当されていた助手の先生から、「住宅団地」の話を聞く機会があった。先生は、地形学の立場から市街地周辺の山麓の傾斜地に急速に進行していく開発に関心を持っておられ、特に土砂災害の危険性について話されたと記憶している。当時、山陽本線で通学していた私は、市街地周辺の斜面が急速に住宅地化する景観を何気なく眺めながら、それを実感していた。とりあえず卒論のテーマを決めなければならないので、あまり深く考えることなく、先生の話ヒントとし、別の観点から「住宅団地」を取り上げることとした。その時には想像もしなかったが、結果的にはこれが今日に続く研究生活につながる事となった。

### 都市の発展と住宅地の拡大

都市には、経済・社会・政治・文化などに関する多くの機能が集積・競合するが、その結果は景観としては土地利用として表れることとなる。都市がある程度大きくなると、同種の機能が特定地域に集まるという地域分化がみられる傾向がある。こうした都市機能のうち、面積的に最も大きいのは居住機能、すなわち住宅地域であろう。この住宅地域の拡大には二つの方向が指摘される。一つは、都心から離れて市街地周辺や郊外への水平的な外延的拡大であり、今一つは、都心周辺を中心にみられる高層化による垂直的拡大である。それらを代表するのが、前者はいわゆる「住宅団地」であり、後者が「中高層住宅・マンション」であろう。

### 広島都市圏における「住宅団地」開発

私は、学部卒業論文と修士論文では、慣れ親しみ土地勘もあり、調査に取り組みやすいという理由から広島市都市圏をフィールドとすることとした。

広島市街は、昭和20年8月6日に投下された原爆により壊滅的な被害を受けたのち、精力的に戦災復興が図られ、市街地整備も精力的に進められた。そんななか、軍都的な性格も強かった広島市街にはかなりまとまった軍用地が存在していた。これらを含め、市街地内部ではかなり公営の中層住宅地への転換が行われていった。また一方で、市街地の面積が狭い広島市の住宅地の拡大の方向は、必然的に周辺の山麓や丘陵地の傾斜地に向かうことになる。

一般に、中国地方には真砂土として知られる風化花崗岩が広く発達しているが、広島市周辺の傾斜地も例外ではない。このような地質は大型の土木機械での開発・造成が容易なため、山麓の傾斜地では急速に開発地域が広まっていった。逆に、風化が進み、降水にもろいという面が懸念され、同時に開発の規

制のための法整備も進められていった。しかし、記憶に新しい平成14年8月下旬に広島市安佐南区で発生した例など幾度か大規模土砂災害を経験してきている。

調査・研究では、この内部と周辺部の両方向でまとまった規模を持つ「住宅団地」を取り上げ、それが「どこで」、「いつ」、「だれによって」、「なぜ」開発され、そこでは「どのような人たちが」、「どこから来て」、「どのような生活をしているか」などを中心に、役所での資料収集、現地での調査・確認などを行うことになる。また、室内では5万分の1の地形図にメッシュをかけ、その中の等高線の本数を計測し、平均傾斜角度を求め、傾斜地と開発地の関係を調べるという細かい作業も経験した。

広島都市圏を対象とした調査研究は、修士論文とその整理で一区切りとした。

### 福岡都市圏の「住宅団地」

次にフィールドとして選んだのは、広島市との比較の観点から、同じ広域中心都市の福岡市である。研究内容の基本は広島の場合と同じであるが、初めての土地で、土地勘がないため、役所での資料集め、現地での確認調査などにおいて、広島時代の恩師、先輩、知人など多くの人に、厚かましくお世話になったことを思い出し感謝している。現地に同行してもらったり、原付バイクを提供してもらったり、自宅に泊めてもらったり、いろいろあった。特に原付バイクで都市圏を走り回った時、のちに気づいたが、その時福大のそばの道路を通っていたことなどが懐かしく思い出される。

福岡市と広島市を比較すると、平地の市街地の広がりがかかなり違うことを感じる。福岡市の市街地の水平的広がりが大きいため、広島市より周辺の傾斜地への開発は時期的に少し遅いように思う。

私は大学院を出た後、3年間高校教員を経験したが、そのあと、思いもよらず新しい職場として声をかけてもらったのが福岡大学だった。福岡をフィールドに選んだ時には、全く想定していなかったが、結果としてフィールドでもある福岡に来ることができたことには幸運で、大いに満足している。何かの縁を感じるところである。

### 都市の高層化とマンションの出現

やがて時代は、東京、大阪など大都市で進行していったいわゆる「マンション」の建設が、地方の主要都市にも見られるようになり、福岡市での第一号は1968年の建設といわれている。以前は、公営を中心としたエレベーター設置義務のない中層住宅が、市街地での団地の中心であったが、民間の中高層住宅が主流の時代になっていくことになる。福岡市も広島市と同様に、戦災による影響を強く受けた都市であるが、復興とともに市街地整備が進められてきた。これに伴って、いくつかの主要市街地での大規模再開発事業、そして各地でのマンション建設が急速に進められていき、市街地の様相が、高層化に向かって大きく変わっていくことになった。

ちなみに私が最初に調査で福岡に来た時は、国鉄の急行「玄海」を利用したと記憶する。福岡大学に着任時は新幹線が開通していた。博多駅も現在地に移転して10年以上経過していたと思うが、九州の玄関口としての博多口側の駅前の高層ビルだけが異常に目立ち、その背後の中洲との間、筑紫口側はほとんど未整備だったのが印象的だった。また、地下鉄工事が進行中で、路面電車が廃止直前だったと思うが、市街地は雑然としていた。

こうした中で、都市内部のマンションも研究対象として大きなウエイトを占めることとなる。マンションも、タイプにより分布・立地地域に特色がみられ、近年は人口の都心への回帰も指摘されている。

### 「都市の居住地域と日常的都市システム」

私の研究の関心は、都市における二方向への住宅地の拡大に伴って、そこでの住民の日常生活の範囲がどのくらいに及んでいるか、そして、その中で地域間の結びつきがどのようになっているのか、という通勤通学圏の検討にも及んできた。その結果、私の研究テーマは「都市における居住地域と日常的都市システム」ということになるであろう。

## 研究こぼれ話

商学部教授 三 浦 隆 之

ヴェブレン（Thorstein Veblen）に初めて出会ったのは、大学2、3年の頃であったから、もうかれこれ50年ほど前のことになる。思えば、私の研究生生活と共にある旧師であり旧友である。とはいっても、実際に直接出会ったわけではない。

受講した外書購読のテキストが、ヴェブレンの代表作の一つ、『企業の理論』（1904年）なのであった。配布されたテキストは、きちんと製本された小冊子風のものであったが、前半部のそのまた前半部の数章しか収録されていなかった。

ところが、これまで紐解いた、あるいは紐解こうとしていた他のどの専門書よりも最初から強く惹き込まれてしまったのである。とにかく表現力が豊かで、要所、要所で使用される的確な用語が頭の中に刻印されていくといった感じであった。

折から、小原敬士による翻訳書が出版（1965年秋）されてからは併読しながら精読できるようになったし、また、ヴェブレンの著書・論文集全12巻が1964年から1965年にかけて復刻出版されたことを知り、院生時代に全巻を買い求めた。

そして、『企業の理論』の続編は、ヴェブレンの後期の著作や論文でも一層研ぎ澄まされて力強く展開されていることを徐々に学んでいった。

ヴェブレンの時代をとらえる目の鋭さは、100年を経た今でも、他の追随を許していない。たとえば、実際に生産現場で機能している資本財の働きの大きさや価値の大きさと証券市場で評価されるその企業価値の大きさと二重性、つまり資本（現実資本と擬制資本）の二重性は多くの論者が指摘してきているのであるが、ヴェブレンは、その先にある問題を提起しているのである。

つまり、企業資本は、とくに株式会社設立時の資本は、昔も今も、国を超えて、法制上、財産出資（現金出資、あるいは少なくとも現物出資）を原則

とするにもかかわらず、合併・買収時には、往々にして、時価総額（擬制資本価値）をはるかに超える買収価額が買収後の企業の新しい現実資本の中に組み込まれるために、マクロ的な帰結としてインフレーションを醸成しやすいということ、しかも、その際の企業資本の積み増し分（膨張部分）capitalized goodwill には、合併・買収の仕掛人にかんがりの新株がほとんど無償で割り当てられてきたために、ヴェブレンはこれを promoter's bonus と呼んだが、さらに旧株式と新株式とのあいだの気前のよい交換比率にもとづく利得も含めて、のちにはこれを capitalized free income = a marketable right to get something for nothing と言い換えたりもしている。

こうしたヴェブレンの capitalized free income の概念は、自社株買いがアメリカで1980年代に、日本で1990年代に解禁されて以降、企業再編とはかかわりなく、もっと日常的に、たとえ株価が落ちてでも稼げる、時価で買い戻した自社株を1ドルや1円で提供するストックオプションなどの株式報酬が蔓延しつつある今日、新しい意味内容が追加された重要な概念になってきていると確信する。

話を年代順に戻すとしよう。1977年の夏には、在外研究員としてスタンフォード大学を訪問した。そこは、ヴェブレンが、かつて教鞭をとった地であり、また、最晩年に舞い戻って終焉を迎えた地であった。学内奥の小高い丘の上に行動科学高等研究所があり、そこで、現代の制度学派の代表者、ウィリアムソン（Oliver Williamson）が私と同じ時期に1年間の自由研究のための休暇を取り始めたばかりであった。例えば、ハーシュマン（Albert Hirschman）が、かつて私が翻訳をした『組織社会の論理構造——退出・告発・ロイヤルティ——』（1970年）を書き上げたのもスタンフォードの行動科学高等研究所なのであった。

1977年の秋口、ハーバード大学のビジネススクー



ルに移動した直後に、チャンドラー（Alfred Chandler）の『経営者の時代』（1977年）の Albert J. Beveridge Prize 受賞を祝賀する学会が開催された。その招聘講演者の一人がウィリアムソンなのであった。歴史家チャンドラーと理論家ウィリアムソンは、大規模化した企業の管理組織の在り方（事業部制革新など）をめぐる研究において、相互に少なからぬ影響を与え合ってきたので、この時期、私も、両者の著作を交互に読むことに集中しつつ、チャンドラーとポーター（Michael Porter）の講義を聴講した。

チャンドラーの研究室はベーカー図書館の中にあったが、当時のポーターの研究室は学生寮の中の一室にあった。ポーターの推薦でアメリカ経済学会に入学し、以来、毎年とまではいなくても、年次大会にはできるだけ参加してきている。

2015年の1月、ボストンで開かれた学会の後で、かつて1年間住んだコティング・ハウスを久しぶりに訪ねた。3時のコーヒー・タイムには、1階の居間に数人集まり、ベルギーから来た研究員 Evrad の素人離れしたピアノ演奏に耳を傾けたものである。研究生活に一服の清涼剤を与えてくれた場所でもある。

長い年月を経て、周りの環境に変化もあった。すぐ横にあったテニス・コートのほとんどが無くなり、跡地に、大きなシャド・ホールが新しく建設されていたので、小さいコティング・ハウスがなお一層小さくなったように見えた。シャド・ホールを寄付したシャド（John Shad）こそ、レーガン大統領の小さな政府と規制緩和の時代に民間から初めてアメリカ証券取引委員会の委員長に就任し、あの自社株買いの解禁を主導した人物なのであった。

ボストンでの在外研究は、わずか1年ではあったが、私の人生に大きな実りを与えてくれた。チャールズ川が分厚く凍り、文字通りの天然アイススケートリンクとなったほどの有史以来という酷寒の冬を経験したし、無謀にも重いテニス・シューズを履いてボストン・マラソンに参加したりもした。その直後に、優勝者ロイ・ロジャースの経営するスポーツ店でマラソン用の超軽量シューズを購入したが、後の祭りであった。また、小澤征爾の指揮するシンフォニーにもたびたび足を運んだし、毎週のように各分野の人たちの講演を聴きにも行った。学者が多かつ

たが、最前列で拝聴したグレース・ケリーが妙に印象に残っている。

帰国後3年を経て、社会科学国際（新渡戸稲造）フェローシップを頂いて、1981年から1983年にかけての2年間、今度は、ペンシルバニア大学経済学部で留学した。そこにあのウィリアムソンがいたからである。

ウィリアムソンは、講義以外に、毎週、特定曜日の夕方前の特定時間に、産業組織論・経営組織論のワークショップを運営していた。いわば、先生たちのゼミナールで、発表者は大学内外の先生たちで、発表の1週間前までにワーキング・ペーパーがあらかじめ配布されることになっていたもので、参加するかどうかは、それを読んでから決めることができたし、議論のための準備もある程度できるはずであった。私はといえば、発表テーマへの関心の強弱にかかわらず、ワーキング・ペーパーの読み込みの深淺にかかわらず、結果的に、2年間全部出席した。

良いなと思ったのは、多少とも形式化しやすい学会発表と違って、ワークショップの参加者はあらかじめペーパーを読んできていることを前提にしているので、発表時間のほとんどすべてが活発な議論だけに費やされたことである。しかも、度肝を抜かれたのは、参加者からの批判を受けて、ほとんど瞬時に、全く新たな数式をものすごいスピードで板書展開する秀才がゴロゴロいたことである。私はといえば、制度的、実証的、思想史的な発表以外は、もっぱら傍観者となっていた。

にもかかわらず、ウィリアムソンは、ワークショップの後、発表者を慰労するために繰り出すレストラン（ほとんど特定のイタリアン）によく誘ってくれた。また、ウィリアムソン夫妻とは、一緒にデラウェア州などを旅行したが、フィラデルフィア管弦楽団の支援者でもあったので、一家の誰かが行けない時などの空いた席にたびたび私を誘ってくれた。以来、タクトだけでなく、腰でも指揮するリッカルド・ムーティのファンになって、指揮する楽団は変わっても、来福時だけでなく、わざわざ東京まで聴きに行ったりもした。

ペンシルバニア大学では、ハーバードもそうだったように記憶するが、教授の奥方は、授業料免除で、受けた科目を自由に受講できるようになっていて、

ウィリアムソンの奥方も、日本文学などを受講していて、三島由紀夫の『金閣寺』などを非常に高く評価していたし、歌舞伎などは私よりもよっぽど詳しくかった。

1983年初夏の帰国早々、ウィリアムソン一家と阿蘇などを周ったが、生卵以外は、日本料理を大変気に入っていたし、当時、レスリングをしていた高校生のご子息は、とくに白米が大好きで、我々のように、ごはんをおかずと一緒に味わうのではなく、一方を呑み込んでから、他方を口に運ぶといった作法であった。

チャンドラーの家には『鳥獣戯画』が飾ってあったが、ウィリアムソンは、茶室に合う竹製の一輪挿しなどをお土産に買っていた。九州の旅の締めくくりに、福岡大学でも講演をしてもらったが、時期的・タイミング的に、先生たちだけ十数名が参加する研究会になった。それにしても、2009年にノーベル経済学賞を受賞することになる人物に身近に師事できたことは幸いであった。

2014年1月、フィラデルフィアで開かれた学会の後で、かつて2年間通った経済学部のマクニール・ビルディングを訪ねると、その周りは、すっかり様変わりしていた。もとは1棟だけだった近くのウォートン（ビジネス）スクールの建物が、まるでマクニールを取り囲むように数棟増設されていたのである。研究室の窓から時々大きく伸びをしながら、はるか彼方まで見晴らしていた頃が懐かしい。

さて、1980年代後半以降は、誰でもよく知っているはずなのに、あまり正当に評価されてこなかったヘンリー・フォード（Henry Ford）が、いかに近代経営の規範たりうるのかを示すことに意を注いだ。

あのヴェブレン（1857—1929年）も、晩年にはヘンリー・フォードのT型車の時代（1908—1927年）と同じ時代に生き、その凄まじいばかりの発展を目の当たりにしたので、ヴェブレンの後期の著作の中では、供給量を意図的に制限して価格維持を図る businesslike sabotage 政策だけではなく、供給量を拡大して単位当りの固定費と価格を引き下げる economy of scale 政策の意義も認識しつつあった。

しかし、ヴェブレンは、economy of scale のドアは開けたが、その中に入っていくことはなかった。彼は、金融王モルガンだけではなく、石油王ロックフェ

ラーや鉄鋼王カーネギーまでもが産業現場から遠く離れた金融取引の中心地において、産業の生産力向上を怠っているとして、海賊船の片目の船長をもじって、one-eyed captains of industry と皮肉った。

しかし、自動車王フォードは違っていた。ヘンリー・フォードこそは、生産力向上＝「分業→機械化（自動化）」の流れに先鞭をつけて、最初に両眼を開けた産業将帥なのであった。ヘンリー・フォードは、それまでの、そして、場合によっては今でもそこかしこに潜伏している「高価格と低賃金」で稼ぐ伝統的な経営姿勢に代えて、「低価格と高賃金」で稼ぐ近代的な経営原理を実践的に打ち立てた最初の産業将帥なのであった。

それでも、フォードが誤解されてきたのは、チャップリンの映画『モダン・タイムズ』で戯画化されたベルト・コンベア生産の根強いマイナス・イメージの残像、さらには、「低価格＝低品質」、「高賃金＝高コスト」といった具合に、古い組み合わせで結びつける人々があまりにも多かったことに加えて、著名な経営学者ドラッカー（Peter Drucker）が、GMのコンサルタントをしながら、T型車終了後のフォード社の批判に終始したばかりか、ヘンリー・フォードが繰り返し力説した “To create customers is the object of a firm.” のフレーズをヘンリー・フォードに一切言及することなく使用したために、ヘンリー・フォードの近代経営の規範としての立ち位置は奥深くに封じ込まれてしまった感がある。

そればかりではない。わが国にも多大の影響を与えたフランスのレギュラシオン学派のリーダー、アグリエッタ（Michel Aglietta）も、フォードイズムをテイラリズムの延長線上において、一括りに労働強化の一環と断じたのであった。

ヘンリー・フォードが実現した economy of scale の実証については、拙著『近代経営の基礎——企業経済学序説——』（2004、2008、2013年）に譲るとして、ここでは、ヘンリー・フォードが、全く新しい意味内容をもった capitalized free income をえたこと、そして、そのことが彼の高賃金政策を導いたことに触れておきたい。

ヘンリー・フォードは、3回自動車会社を立ち上げた。そのすべての会社設立にあたって、彼は共同出資者の一人であったが、一度も出資金を払い込ん

だことはなかった。いずれの場合も、他の共同出資者たちが、何度も自動車レースで勝つヘンリーの自動車づくりの腕に惚れ込んで、彼の現物持ち込みの工具を彼の能力と込みで高めに評価したり、会社設立前に、ヘンリーの分まで肩代わりしたパートナーシップを編成したりしてくれたので、法制上の資本化とは本質的に異なる資本化をヘンリーは享受することができたのである。

しかし、いずれの場合も、ヘンリー以外の大半の共同出資者たちは、高価格路線を望み、低価格路線を目指すヘンリーとことごとく対立するようになった。そして、1回目の会社はヘンリーがいなくなり解散。2回目の会社はヘンリー離脱後に高価格車の代名詞となったキャデラックをつくる会社となった。3回目で最後の会社となる Ford Motor Company も、軽量・高品質・低価格の T 型車に一本化する前に、8つの型式の車を生産した。

ちなみに、フォードの大量生産方式とトヨタのリーンな（ぜい肉をそぎ落とした）生産方式とを対比して、現在の定説となった、ウォマック（James Womack）ら MIT の研究グループの『リーン生産方式が、世界の自動車産業をこう変える』（1990年）では、T 型車を20番目の型式の車としている。T はアルファベット順では、確かに20番目ではあるが、T 型車は実際には9番目の型式の車なのであった。そして、低価格路線として A→C→F→N→R→S→T 型という変化があり、高価格路線として B→K 型という変化があったのである。

1903年の会社設立時に25.5%であったヘンリーの所有持分は、1906年には高価格路線株主の株式を買い取って、58.5%の過半数支配株主となり、1919年にはすべての株式を買い取って、当時世界最大の産業会社をフォード家だけで所有することになった。それは、ヘンリーの高賃金政策を理解する株主が彼以外誰もいなかったからであった。

ヘンリーは、株式を所有しているだけの無機能資本家を寄生者（parasite）と呼び、知恵を出し工夫して働く従業員を実質的な機能資本家としてとらえていた。だから、事業が成功した時には、単なる賃上げではなく、利益分配（profit sharing）をしたいと考え、それを倍額賃金などの形で実施したのである。このような高賃金政策の背景には、彼自身が、これ

まで会社には1セントも拠出していないのに（代わりに多大なるタレントを提供して）、大株主としての利益分配権をえてきたことが大きく作用しているのは間違いないであろう。

こうしたヘンリーの経営姿勢は、現代のストックオプションの適用を受けるべき対象者の範囲を考える際にも思い起してもらいたいものである。

2004—2005年の1年間は、海外研修員として、ケンブリッジ大学のプラッテン（Cliff Pratten）に師事した。スミス（Adam Smith）以来、連綿と続くピン工場の分業の実態と原理をめぐる議論に関心をもつ者同士であった。たまたま私が訪ねた時期は、彼が経済学部を退職した直後であった。週1回特定曜日の昼食時に大学図書館で会うようにしていたが、彼も私もほぼ毎日図書館に通うため、ほぼ毎日のように一緒に昼食を取りながら、雑談の合間に、専門的な意見交換もできた。気さくな人柄で、革ジャンとビールの好きな方であったが、私の帰国後、それほど間をおかずに他界された。さらに、チャンドラーやハーシュマンにも先立たれた。歳をとることの意味を実感している。

2015年1月には、『成長を買う M&A の深層』（創成社）を新書サイズで上梓した。フェイスブックが創業間もないワッツアップ（従業員数55名）を日本円にして2兆円強で買収したが、その2割を現金で、8割を株式で支払うことの意味、また、サントリーがビームを1兆7千億円で買収したが、その買収価額の98%が無形資産価値であることの意味、などについて論じている。

振り返れば、在職45年になろうとしている。そのうちの4年間は、海外で研鑽をつむ機会を頂いた。また、在職中は、たくさんの先輩・同輩諸氏に大変お世話になった。皆様の温かいご指導やご支援に心から感謝している。



## 酒は百薬の長か

医学部教授 畠 博

福岡大学に赴任して37年間研究に従事してきましたが、目の前にある課題に対応するのに精一杯で場当たり的に、これを遣ったり、あれを遣ったりで、残念ながら、これ一筋といった一貫したテーマについて研究して行くということができませんでした。しかし、ただ一つだけ、楽しみながら遣った愉快的な仕事がありますので、それを紹介したいと思います。

筆者は、酒はあまり強くないのですが、夜に酒の肴をつまみながら、一杯傾けることを何よりの楽しみにしています。健康を扱った雑誌には休肝日を週2日設けなさいと言われていますが、そのようなことにはお構いなしに、ほぼ365日酒を飲まない日はありません。

中国の漢詩には友との再会を喜び、友との別れを悲しみ、酒を酌み交わす詩が沢山詠われています。詩仙と謳われた李白には酒にまつわる漢詩が多くあり、特に有名なのが以下の漢詩です。

山中にて幽人と対酌す  
 両人对酌すれば山花開く  
 一杯一杯また一杯  
 我酔うて眠らんと欲す卿且く去れ  
 明朝意あらば琴を抱いて来たれ

酒は生活に欠くべからざるものですが、筆者が専門としている予防医学では、酒を飲むことは悪いことと見なされていました。予防医学の重要な活動の一つとして、地域住民を対象にした生活習慣改善の指導があります。生活習慣改善の指導する専門職が保健師さんです。現在はそれ程ではありませんが、医師に成り立ての頃、保健婦さんが「タバコと酒は身体に悪いので止めなさい」と、きつく指導しているところを見て違和感を覚えました。酒は神代の昔から「お神酒」と言われ、嬉しいにつけ、悲しいに

つけ、飲む続けられて来たものであり、酒がそれ程身体に悪いものならば、飲酒という習慣が数千年にも渡って続いて来なかったと思います。何時か自分で研究を行い、酒が本当に身体に悪いのか、明らかにしたいと考えていました。

予防医学分野の研究方法にコホート研究という方法があります。例えば、喫煙と肺がんとの関係を明らかにしようとした場合、喫煙をしている1万人と喫煙をしていない1万人を10年程度追跡して、両群の肺がんの発生数を比較します。そうすると、肺がんの発生数は喫煙群から80人、非喫煙群から20人であったとすると、喫煙者は非喫煙者と比べると、肺がんになり4倍なり易く、喫煙は肺がんのリスク要因であることを明らかにすることができます。

酒は血圧を上昇させたり、肝臓に負担をかけたりと身体に有害な作用を及ぼします。また、アルコール依存症になると、社会に大きな迷惑を掛けることになります。しかし、一方、酒には大脳皮質の抑制が取れて、リラックスしてストレスが軽減するなどの良い面もあります。筆者の興味の一つは、酒には良い面と悪い面がありますが、トータルとして飲酒は身体にとって良いのか悪いのか、また、飲酒量により身体に対する影響が異なるのであれば、どの程度の飲酒が最も良いかにあります。もう一つの興味として、日本で日常的によく飲まれている酒は日本酒、ビール、焼酎ですが、飲むとしたら、この三つの中でどれが一番身体に良いかです。幸いにも、福岡県では飲む酒の種類が日本酒、ビール、焼酎に丁度3等分されます。福岡県以南の熊本県と鹿児島県は焼酎文化圏で、飲む主な種類は焼酎とビールに、本州や四国では日本酒とビールになります。日本酒、ビール、焼酎の健康に対する影響の違いを明らかにする研究は福岡県でしか行えないものです。

研究の概要は、40～69歳の地域住民約7千人を約

8年間追跡して、その死亡状況について観察するというコホート研究です。本研究のアウトカムは飲酒の個別的な疾患への影響ではなく、トータルのそれをみるために全死因死亡としました。表1に、非飲酒群のリスクを1として、飲酒量別の全死因死亡に対する Risk ratio を計算し示しました。当然、年齢や喫煙習慣は死亡に関与する大きなリスク要因であるので、多変量解析という方法で、それらの要因の影響を除いています。

表1 飲酒量別にみた全死因死亡に対する Risk ratio

飲酒量	Risk ratio
Nondrinkers	1.00
Ex-drinkers	2.09
Drinkers	
Occasional	0.71
1 合未満/日	0.51
1～2 合/日	0.72
2 合以上/日	0.86

Risk ratio：Nondrinkers のリスクを1とした時の相対リスク

結果は酒を愛し嗜む者にとって嬉しいものでした。飲酒量が1合/日までの者では非飲酒者と比べると、Risk ratio は0.51であり、全死因死亡のリスクが約半分になるという結果でした。筆者は毎晩ビールを850ml 飲みます。これを日本酒に換算すると、1.7合になります。1～2 合/日の Risk ratio は1 合/日未満と比べて少し上がりますが、それでも0.71で、非飲酒者よりリスクが低いという結果でした。非飲酒者の中には元々身体が弱くて酒を飲まない人を含んでいますし、禁酒者の Risk ratio は2.09とかなり高くなっていますので、飲酒者のリスクが実際より低く出ている可能性はあります。しかし、それを考慮しても、2 合/日までの飲酒であれば、病気に罹っている者とか、元々酒を受け付けられない体質の人を除いて、健康に大きな悪い影響はないと思われました。

次に、飲むなら日本酒、ビール、焼酎のうち、どれが最も身体に良いのでしょうか。飲酒量別の解析と同様にして、年齢、喫煙、飲酒量の影響を調整して、酒の種類別の全死因死亡に対する Risk ratio を求めて表2に示しました。Risk ratio は非飲酒者のリスクを1として計算しています。

表2 酒の種類別にみた全死因死亡に対する Risk ratio

酒の種類	Risk ratio
Nondrinkers	1.00
Daily drinkers	
日本酒	0.45
ビール	0.66
焼 酎	0.96

結果は、日本酒を飲む者のリスクが最も低く、次いでビール、焼酎という順でした。この結果をどのように解釈したらよいものやら、悩みました。赤ワインにはポリフェノールが多く含まれており、身体に良いといわれています。日本酒にはフェルラ酸という抗酸化作用を持つ物質が含まれていると言われています。日本酒に含まれている抗酸化物質の健康への影響についてはほとんど分かっていませんので、今後の研究を待ちたいと思います。

現在、筆者はこの研究結果を以下のように解釈しています。

日本酒にはやはり刺身で、魚を中心にした日本食がよく合います。魚には動脈硬化を予防する EPA（エイコサペンタエン酸）や DHA（ドコサヘキサエン酸）が沢山含まれ、たんぱく質やカルシウムが豊富です。一方、ビールには脂っこい肉がよく合い、そのために悪玉コレステロールである LDL コレステロールが高くなり、日本酒を飲む人よりメタボリック症候群になるリスクが高くなるのではないかと考えられます。焼酎については、一般的に焼酎を飲む人はソーシャルクラスが低く、ソーシャルクラスが低い層では全死因死亡率が高いことが知られています。このように、酒の種類別の死亡リスクの結果は酒の種類とそれに合う食事との協働作用や社会的要因としてソーシャルクラスに関連していると考えるのが妥当だろうと思います。

ビール好きの筆者にとっては、少し残念な結果でしたが、刺身をつまみにビールを飲めば、結構身体に良いのではないかと、我田引水の的な解釈をしています。あと何年続けられるか分かりませんが、ビール1日 850ml の晩酌と月2回程度居酒屋に行って生ビール3～4杯飲むことを楽しみに退職後の生活を送りたいと思います。